

(別添)

世界遺産暫定一覧表への追加記載を了承された3件の文化遺産の概要

本日開催された世界遺産条約関係省庁連絡会議において、世界遺産暫定一覧表に追加記載が了承された3件の文化遺産の概要は以下のとおり。

【1. 北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群】

縄文遺跡群は、農耕・牧畜を基盤として形成された他の地域における新石器時代の遺跡とは異なり、完新世の温暖湿潤な気候に基づく自然環境の中で約10,000年もの長期間にわたって日本列島に継続した狩猟・漁撈・採集を主たる生業とする、定住の生活実態を表す独特の考古学的遺跡群である。これらは、長期間にわたり継続した自然と人間との共生の在り方を示し、独特の文化的伝統を表す物証として顕著な普遍的価値を持つ。

特に、北海道・北東北を中心とした地域においては、海岸部・河川流域・丘陵地帯などの多様な地形に位置する集落跡・貝塚・環状列石・低湿地遺跡などから成り、食料資源が豊富な落葉広葉樹林や海・河川といった自然環境への適応の在り方とそれに伴う定住の確立・展開の過程を顕著に示している。

【2. 九州・山口の近代化産業遺産群】

九州・山口の近代化産業遺産群は、19世紀中頃、欧米列強のアジア進出への危機感の中で、江戸幕府や雄藩等が進めた自力による西洋技術の導入と、これを基礎として、明治維新後に九州・山口地域において、政府及び民間資本により進められた近代工業化の過程を示す一群の諸要素から成る産業遺産である。非西洋地域において、最初でかつ極めて短期間に飛躍的な進展を遂げた日本の近代工業化は世界史的にも特筆すべき事柄であり、本遺産はその過程を明確に示す資産として顕著な普遍的価値を持つ。

本遺産は、近代化の端緒から達成までの流れにおいて、相互に密接な関連を有する「自力による近代化」、「積極的な技術導入」、「国内外の石炭需要への対応」、「重工業化への転換」の4つの象徴的な要素から成る。

【3. 宗像・沖ノ島と関連遺産群】

4世紀から10世紀の東アジアにおいて、大陸との交渉に際して航海の安全祈願のための国家的祭祀が行われた沖ノ島と、祭祀に関わった古代有力氏族に関連する考古学的遺跡から成り、「島」に対する日本固有の自然崇拝思想の原初的な形態を残すのみならず、その祭祀行為が現在にも継続している遺産として顕著な普遍的価値を持つ。

宗像・沖ノ島と関連遺産群は、豊かな自然環境に覆われた玄界灘に浮かぶ孤島であり、東アジア最大級の祭祀遺跡が存在する沖ノ島、沖ノ島に対する祭祀に関わった胸形氏の墓域である津屋崎古墳群、沖ノ島に対する信仰の在り方を今なお継承している宗像大社の境内及び社殿群により構成される。

(了)